

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(東青地区) (第2回) 概要

日時：令和2年12月17日(木)

13:30～15:30

場所：ウエディングプラザ アラスカ
地下1階 サファイア

<出席者>

委員

成田 一二三 委員、渡辺 伸一 委員、勝野 義彦 委員、吉崎 博 委員、
五十嵐 義人 委員、賀田 州一 委員、工藤 幸治 委員、泉 夏樹 委員、
載本 一 委員、福原 正人 委員、小松 達弘 委員、前田 眞己 委員、
濱田 一博 委員、笹木 正信 委員、飛内 文代 委員、松野 洋祐 委員(進行
役)

オブザーバー

菅原 文子 県立青森西高等学校長、 前田 済 県立青森東高等学校長、
高谷 悟 県立青森北高等学校長、 中道 哲 県立青森南高等学校長、
吉澤 郁 県立青森中央高等学校長、 對馬 嘉晴 県立浪岡高等学校長、
赤井 茂樹 県立青森工業高等学校長、 三上 雅也 県立青森商業高等学校長、
渡部 靖之 県立北斗高等学校長

1 開会

2 新任委員紹介

3 事務局説明

(1) 第1回地区意見交換会における主な意見

(2) 第1回地区意見交換会における意見に基づく資料

- 事務局から、資料1及び資料2について説明した。

4 意見交換

(1) 各学校配置シミュレーションにおける効果・課題等

- 事務局から、資料3について説明した。

- 委員から、次のような意見があった。

《東青意見1》

- 《東青意見1》は、重点校が青森高校、拠点校が青森工業高校と青森商業高校の2校という形で、今までと変わらないということになる。よって、重点校、拠点校の現学級数を維持すると、連携校の中で4学級減が必要ということになる。その場合、課題としては、重点校、拠点校以外の学級数が徐々に減っていき、学校規模の標準となる1学年当たり4学級を維持できるかという点になるかと思う。

統廃合は避けたいが、学級数が減っていくことについては葛藤があり、悩んでいるところである。

- 《東青意見1》は、これまでの学校数が維持されるため、進路選択への影響が比較的少ないと思っている。

青森市の中学生の進路選択の傾向について、拠点校になっている青森工業高校と青森商業高校を例にとると、青森工業高校の場合は、東部地区にある4つの中学校から40%程度が入学している。また、青森商業高校も東部地区の4校から37%程度が入学している。市内の残りの中学校15校と比較して東部地区の4校の志望割合が3倍から4倍程度高くなっており、高校で何を学びたいかということ以上に、高校の所在地が近いことが学校を選択する大きな動機になっていると見ざるを得ないと考えている。

学校数を減らす場合、子どもの選択肢は減ることとなるため、どのように他の高校へ通学させるのかということを中心に踏み込んで考えなければ、学びを諦めてしまう生徒をたくさん生み出すことになると考えている。

また、浪岡高校については、青森市から88%程度の生徒が入学している中、地元の浪岡中学校と、浪岡地区に近い新城中学校、三内中学校の3校からの入学者で75%程度を占めている。

学級数が減ることで学校が機能しなくなるということは十分理解しているが、生徒の進路選択には地域性が色濃く出ていると考えているため、学校の統廃合についてはかなり慎重に考えていただきたい。

例えば、これまでの計画で既に募集停止となった学校が所在する地区について、生徒の進路選択がどのような状況になっているか伺いたい。

- (事務局) 分析を行った上で、可能であれば、次回の第3回地区意見交換会で資料提供させていただきたい。

- 統廃合により高校がなくなった場合、子どもたちは統合先の高校を選択するのか、それとも進学を諦めてしまうのか、どのような選択をするのか大変悩ましいと考えているため、学校数を減らすということについては、データを踏まえながら慎重に判断していただきたい。

- 青森東高校平内校舎については来年3月で閉校となるが、現在在籍する3年生7名のうち平内町出身者は2名しかいない。特色がない普通高校のままであれば、浪岡高校も同様の状況になることが懸念され、浪岡高校の存続を目的と

するのであれば、他校にはない特色のある学科の設置等を考えていく必要があると考えている。

- 《東青意見1》には大賛成である。4学級減が必要ということであれば、重点校以外の学級数の多い学校から順次削減し、入学者数が定員を大きく下回っている浪岡高校についても1学級減らした上で、現在ある学校を存続させるべきだと思っている。

次に、今般、新型コロナウイルス感染症対策を目的とした少人数学級の導入に係る新聞報道等があったところだが、このことは、きめ細かな指導をする上でも是非実現していただきたく、全国都道府県教育長協議会のみならず、全国知事会等を通じて強く働きかけていただきたい。

また、職業学科、スポーツ科学科、外国語科については、1学級当たりの生徒数を30人とし、教員の不足分は退職教員等による教科指導に係る非常勤講師を配置して補うことが考えられる。予算措置することで対応が可能だと思うので検討していただきたい。

- 上磯方面の子どもたちは、青森北高校今別校舎がなくなることで、通学に非常に不便を感じているところだが、《東青意見1》では現在の学校がそのまま存続するため、鉄道を上手く使いながら通学ができている現状を踏まえると大きな支障はないと考えている。

- 第3期実施計画期間における5学級減を見据え、学校自体を減らしてもよいのではという思いを持っていた。郡部の中学校にアンケート調査等を行った上で、現在の進路状況も加味し、学校を1つ減らしても良いのではと思っている。

学校を選択する際には、ある程度成績で選ばざるを得ない面もあり、普通高校であればどこでも良いという生徒にとっては、自宅から近い学校を選択するという地域の傾向も勘案した上で、学校を1校減らしても問題はないのではないかと。

- 令和9年度には、今以上に子どもの数が減っていることが想定される。やはり、子どもたちのニーズに合わせ、倍率の高い学校はそのまま残し、ニーズがあまりない学校から順に減らすのが一番良いと思っている。

- 《東青意見1》で学級数の削減を考えるのであれば、基礎データにある、定員割れを起こしている学校から優先的に削らざるを得ないと考える。

その場合、青森北高校の普通科、スポーツ科学科、そして青森南高校の外国語科、青森中央高校、あとは断然低い数字になっている浪岡高校が考えられる。

ただ、浪岡高校が学級減となった場合、学校として維持できるかというところが懸念される。

- 倍率の低い学校から学級減をした場合、青森高校の質の低下が見込まれるため、倍率だけで検討することは厳しい。

また、この国を伸ばしていくためには、工業高校のものづくりも必要であり、重点校、拠点校の規模は維持せざるを得ないと思うが、学力レベルの維持という点も考えていかなければならないと思っている。
- 私は全ての学校を残すという意見に賛成であり、学級減による影響を防ぐ方を議論すべきだと考えている。例えば5学級規模であっても、習熟度によって6学級に展開して授業を進めることも可能だろう。

また、新聞報道にもあったように、この国の将来のことを考え、1学級40人に縛られず、少人数学級編制を進めていくべきであると思う。

青森北高校のスポーツ科学科や、青森南高校の外国語科について意見が出たところだが、これらの学科はまさに特色あるカリキュラムによって教育活動を行っていると同っており、このことも踏まえ、さらに一步踏み込んで協議する必要があると考えている。
- 青森高校については、スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールといった非常に特色ある取組をしている学校という印象がある。このように各高校が独自の特色を打ち出せば、中学生が進学する際の判断材料の一つになり、良い意味で子どもたちの志望が分散すると考える。

寄り道になると思うが、各校の特色化の取組を見た上で、統合等を考えるという方法もあると思っている。

青森商業高校、青森工業高校のような専門高校については、特色ある学校として子どもたちの選択肢の一つとなっている。普通高校についても特色をもっと打ち出していきたい。

《東青意見2》

- 進行役から、重点校の配置に当たって、現在の県の考え方について事務局に確認があった。
- (事務局) 重点校は、生徒数が大幅に減少する中であっても充実した教育環境を整備し、本県高等学校教育全体の質の確保、向上を図るため配置しているものであり、重点校が地区の中核的役割を担い、特色ある教育活動に取り組むとともに、得られる成果を連携校と共有することで、これまで各校がそれぞれ取り組んできた教育活動の更なる充実を図ることとしている。

よって、第1期実施計画においては、各地区に重点校を1校配置し、他の高校と連携を図る体制としている。
- 委員から、次のような意見があった。

- ライバル校同士が切磋琢磨して、共に向上する相乗効果が出てくると考えられる。

事務局から重点校の考え方について説明があったが、私は懐疑的である。県立高校の校長を務めた経験上、他校は全てライバル校であり、今の県立高校の校長も、恐らく本音は他校には負けたくないというような思いで学校経営をしていることと思う。

また、《東青意見2》の場合、青森南高校の外国語科を募集停止すべきと考える。文部科学省は急速なグローバル社会の進展に対応する人財の育成を図る観点から、普通教育の中で英語教育を充実、発展、向上させていく施策を進めており、本県でも三沢高校、田名部高校にあった英語科を募集停止している。

よって、必ずどこかを減らさなければならないというのであれば、思い切って青森南高校の外国語科を募集停止するべきだと考えている。

- 切磋琢磨という観点は理解できる。一方で青森東高校が6学級で維持されることにより、学級減の対象となる学校数が減るため、連携校に与える影響が大きいと思われる。その点を考慮する必要があると考える。

- 重点校を2校設けた場合、確かに切磋琢磨できると思うが、重点校としての役割分担や連携に係る体制の構築がとても難しくなると考える。

また、全県的に見れば、中南地区や三八地区でも同じような状況にあり、東青地区だけ重点校2校というのは、他地区からどのように見えるか懸念される。

重点校、連携校は新しい考え方であり、今まさに取組が進んでいる状況で、成果が出てくるのはこれからだと思っている。大きな変更を加えることは拙速になる可能性があるかと危惧している。

《東青意見3》

- 具体的に申し上げますと、青森西高校と浪岡高校を統合し、新設校を設置すれば良いのではないかと。理由は、浪岡地区から通学する生徒を考えたときに、JR奥羽本線一本でつながり、駅から10分程度で通学できる交通アクセスの良さである。

その上で、学級減の話になるが、青森南高校の外国語科1クラス分、新設校から2クラス分、そして基本となる学校規模の標準が4クラスということであれば、他の高校で1クラス分の学級減を考えていけば、この問題は解決していくと考えている。

- 子どもの人数が少なくなっていく中で、将来的には統廃合も必要なのかもしれない。ただ、新設校の場所も含めて考えていくことは、今後重要な課題になっていくのではないかと。

- 青森西高校と浪岡高校の統合で良いのではないか。また、青森西高校の校舎は古くないため、そのまま活用したほうが良い。浪岡高校は学級数の減少に合わせ、校舎を集約化しているため使用できないと思われる。
なお、校舎については、新しく建てるかどうかを含め、市町村の意見を聞きながら検討を進めていただきたい。

- いわゆる35人学級の実現については、時間を要するかもしれないが、実現できるよう力を合わせて働きかけていくことが大事だろう。
また、限られた予算の中で適正に学校を配置するという視点も大事だと思う。例えば、非常に生徒数が少ない学校に多くの予算を使うことはどうなのか、という考えもある。
浪岡高校が焦点になっているが、浪岡高校の特色化を図った上で全国からの生徒募集を導入できないだろうか。それが可能であれば、私は《東青意見1》に賛成である。ただ、それが叶わないのであれば、やはり将来的なことを考え、統合も避けられないことだと思っている。
仮に統廃合をすることになるのであれば、県教育委員会には、統合校に通うための下宿、寮等を含めた通学手段の保証を考えていただきたい。また、小規模化による教育の質への影響等を地域にしっかりと説明していただきたい。

- 青森東高校平内校舎が募集停止となり、平内町の生徒は青森市内の高校や、上北地区の野辺地高校等に通学している。浪岡地区の方からは、青森市よりも中南地区の高校に通っている生徒が多いという話も聞いたところであり、そのような点も加味しながら検討していく必要があるのではないか。

- 新設校とはいっても、結果的に浪岡高校が統合により吸収されるという形に変わりはないと思う。私としては、《東青意見3》には賛同できない。
浪岡中学校には県外の子どもが多数入学していて、それらの生徒が浪岡高校にそのまま進学していくという特色がある。県外から来ている生徒は部活動を目的としているようであり、部活動を特色として浪岡高校に全国募集を導入することが考えられないかということと、浪岡中学校から浪岡高校に進学している生徒が、青森市内の他の高校と統合したときに志望するのかという懸念もあるので、《東青意見3》については様々な視点から考えていく必要があると思っている。

(2) 全国からの生徒募集の導入範囲と効果・課題等

■ 事務局から、資料4について説明した。

■ 委員から、次のような意見があった。

○ 全国からの生徒募集については、本県への移住定住につながる可能性があるため是非進めていただきたい。手始めとして、寮が整備されている名久井農業高校等の職業教育を主とする専門学科を有する学校から導入してみてもどうか。

そのほか、地域校には市町村の意見を踏まえながら、職業教育を主とする特色ある学科を設けた上で導入してはどうか。なお、浪岡高校も含めて考えることができるのであれば検討していただきたい。

■ 進行役から、県外出身の生徒が在学している浪岡高校の状況について、オブザーバーである浪岡高校に確認があった。

○ (浪岡高校) 本校は小規模校であるが、他校では埋もれてしまうような生徒にも役割が与えられ、成長する事例が多い。小規模校だからこそ生きる生徒がいると感じている。

現在、本校に在籍する122名の生徒のうち、バドミントン部の生徒が19名おり、そのうち15名が県外出身の生徒である。本校に入学する生徒の約半分が浪岡中学校の生徒だが、浪岡高校しか入学できないから仕方ない、という思いで入学してきている。しかし、そのような生徒であってもバドミントン部の生徒に牽引され、全校で取り組む空き缶壁画の制作等を通じてリーダー性を発揮し、成長していると感じている。

本校では大部分の生徒が就職を希望して入学してくる中、小規模ながら先生方が一生懸命指導し、基礎データにもあるが、専門学校も含めた上級学校に47.6%、今年度の実績では50%程度の生徒が進学している状況である。

県外出身の生徒については、中学校の時点から下宿生活を続けており、生活上の心配等を感じていない。むしろ、県外から生徒が集まる全国レベルのバドミントン部を有することが特色となり、様々な課題を抱える子どもたちを小規模校の良さで伸ばすことができていると考えている。

○ 全国から生徒が集まり、全国的に活躍しているバドミントン部に加え、浪岡地区にはスポーツ施設が充実している。バドミントンを含めてスポーツで生徒を育てるということも大きな特色となると思うので、可能であれば浪岡高校にスポーツ科学科のような学科を設置することを提案させていただきたい。

- 進行役から、事務局に対して、次回の第3回地区意見交換会の開催前に、これまでの意見交換会における意見等を項目ごとに整理し、当地区の主な意見を整理案として委員に送付するよう指示があった。

その上で整理案について事前に各委員から意見を提出し、第3回地区意見交換会に資することとしたい旨の発言があった。

5 閉会